

# 「ブータン、幸せの国」を旅して

東京のブータン、武蔵村山在住  
河島 良政（亀津出身）



私達を乗せた小型のボーイングは三〜四千メートル級の山あいを縫うように回り込みながら無事着陸。澄み切った青空と心地よいそよ風に、長旅の疲れが一気に吹き飛んだ。そのあおぞらの下には岩肌むき出しの山々に、標高が高いせいなのだろう、育ちの良い松の木がポツ、ポツとへばりつくように生えていた。目線を下げると、雪解け水で切



り込まれた谷川沿いに白壁の民家とその周りに黄金色した稲穂が段々にかがやいていた。唯一の国際線「パロ」空港に降りて最初に目にする「幸せの国、ブータン」でした。十五年ほど前の事、ジャイカの仕事でブータンに赴任し、現地妻をめぐり、拳句の果て二人の子供まで作り置きしている仕事仲間がいて、ブータンと言う国の一種鎖国である



「GNH」なる指標を編み出して「GNP」だと十八万円、月収にして一万五千元という貧しい国ながら人々は今の生活に満足し、幸せ度ならどの国にも負けないこの世の（ラスト）シャングリラ）などとはやまれ、マスコミでの話題に事欠かない。事実、周りのどかな景色も、町のたたずまい、通る人達も「しあわせだよ」とほほ笑んで皆挨拶してくる。ゴ

がゆえに面白さ、素晴らしさなどをさんざん聞かされていた。「いつかわ行かなければ」と言う長年の夢が実現、やっと今回（平成二十三年十月）、女房と二人で行って来ました。

やキラーと言う民族衣装を着こなして、焦るでもなく、物欲しそうなそぶりひとつない、只、只のどかなのだ。

それでも街の中はビルの建築現場がいたるところで進み、道路、橋も新しくなり水道、電気のインフラも一昔前とは様変わりらしい。しかし、よく見ると竹と縄だけで組み上げられた建築足場の上、深い穴の中でスコップで基礎を掘る人達、道路で熱気立つアスファルトをのぼす人々は、使い古しのTシャツに汚れたジーン姿だ。黄色のヘルメットの奥から見える顔はなぜか皆ひとときわ黒いのだ。実は建設労働者のほとんどが宗主国でもあるはずの隣国インドからの出稼ぎで、驚いたことに田んぼでの稲刈り、運搬の重労働にもインド人が働いていた。

カースト制がいまだ根強く残るインドは確かに貧民が多く、それでもブータンに来て働ける事だけでも幸せなのだろう。彼らが何処にすんでいるのか？ どうも山あいの奥まった所に集落を作って暮らしているらしい。

顔一面にはほほ笑みをたたえ幸せを称えるブータン歌劇団、出し物はもちろん「幸せの国、ブータン」。



スポットライトの届かない裏方は、汗まみれに大道具を支え、あわただしく小道員の準備に追われる黒子達、（顔色の黒い人たち）がいる。「幸せの国ブータン」のステージはまだしばらくは続きそうです。

帰りはスモッグが立ち込め、あふれる車と雑踏のインド、ニューデリー空港を我らが「幸せそうな国、日本」向け出発しました。

※少し古い旅日記で申し訳ないです。私達が田舎で牛のしっぽを見ながらクンマの周りを一日中追い回したところを彷彿とさせる、いいお国柄です。ほんまにお時間があれば是非一度お尋ねあれ!!